

情報活用能力を育てる国語教育のあり方

—小学校における指導—

結城 卓彦¹ 岩間 久美子¹

これからの情報化、国際化時代を生きるためには、あふれる情報の中から必要なものを収集・整理して自分のものとするとともに、自分自身の考えを深め自ら情報を発信してゆく実践的な能力が求められている。この認識を基底に、小学校での現状を分析しつつ、情報活用能力の育成を目指した実践事例集を作成した。

はじめに

現在の社会は、ますます捉えがたく見えにくくなってきているが、とりわけ、子どもたちを取り巻く状況は、これまでになく厳しい様相を呈している。いわゆるいじめ・校内暴力の深刻化、不登校の児童・生徒数の増加、偏差値偏重や受験競争の激化、援助交際、薬物依存、そして最近浮上してきたいわゆる学級崩壊といった新たな問題等にさらされ、右往左往する子どもたちの姿を浮き彫りにすることが出来る。それは、先行き不透明な大人の社会に広がる生きにくさがそのまま反映した状況ということでもある。中教審答申は、ゆとりのなかで生きる力を育むことを提言しているが、流動化し、複雑化する社会のなかで、子どもたちが自らの生き方を考え、本来の生きる力を身につけることが際だって難しくなっているのではないだろうか。

この大きく変わろうとする社会が要求する国語教育の課題とはなにか。現代社会に生きる人間は、国際化、情報化ということばで象徴される社会の激流の中で、事あるごとに自らの意志や判断が問われる場面に立ち会うことになる。そこは、また否応なく様々な事象や人間のなかで生きることを要求されとともに、多くの情報を受信したり発信したり柔軟なコミュニケーション能力が期待される社会でもある。そして、さらに、この時代をよりよく生きるということは、それぞれが自らのアイデンティティーに依拠しつつ、自分なりの意見やことばを持って向き合うということであり、そこでは、論理的な思考

力や表現力が不可欠な要素として求められる。

本研究では、ここでいう広い意味での能力の育成をこれからの国語教育の課題の一つと捉え、現在様々な議論が展開されている「情報活用能力」をキーワードとして本テーマを設定した。

さて、この「情報活用能力」とはなにか。前述したこれからの国語教育の課題を解きほぐすのに有効な能力足りうるのか。もちろん国際化、情報化社会が要求する課題のすべてに対応することは不可能にしても、問題の所在を明らかにすることも含めて、相応の成果が期待されるに違いない。少なくとも、現在、あふれる情報の中から必要なものを収集・整理して自分のものとするとともに、自分自身の考えを深め、情報を発信し、発信していく実践的な能力が求められており、その育成を目指した研究や実践が蓄積されることが急務となっている。

本研究は小学校での現状を分析しつつ、国際化、情報化社会を生き抜くための基礎としての「情報活用能力」の育成を目指した指導を意識的かつ積極的に実践していくための手引きとなる資料を提供しようとするものである。この中で、個々の教員の意識改革と授業の工夫やアイデアがますます重要な意味を帯びてきている現在、これまでの授業のあり方を見直すとともに、楽しく、しかも時間的に無理のない発想豊かな指導のあり方をも視点の一つとした。

研究の内容

事例集の作成に当たり、調査研究協力員会では当然のことながら「情報活用能力」とは何かが議論の中心になった。しかし、すぐにはそこにたどり着け

1 教科第一研修室（国語）研修指導主事

なかったが、先に確認した国語教育の課題を論議するとともに、先行の指導事例や協力員それぞれの授業実践や考えの基に作成した具体的な指導シートを検討する中から、その意識的な指導の必要性や意義についての共通理解が得られるようになった。

次に、個々の教材を扱う際に「情報活用能力」のどこに視点を置くべきかの検討に入り、「情報」に付随してよく使用される用語である、収集すること、整理すること、そして発信することの三つに類型化することになった。とはいえ、このねらいは簡単に分類して済むものではなく、3つの類型が相互に重なっているものであり、あくまでも便宜的なものであることを確認した。

また、指導の場については、指導要領のことばから〈理解・表現・言語事項〉の三つに分類した。

それぞれの事例については、中心になる観点で分類したが、複数の指導のねらいや指導の場になったものもある。無理に観点を絞ることなく、どちらに重点を置くかは、実際の指導の場で学級の実態に合わせて柔軟に活用できるよう配慮し、指導の流れや留意点の概略がつかめるように簡潔な表現を心がけた。

学年の欄については、教科書単元との関わりを優先して記入したが、扱い方によっては、他の学年でも使用出来るものもある。

ここに取り上げた事例の選定にあたっては、教科書教材を扱う例や単元の発展として考えられるものなど、出来るだけいろいろな観点のものが入るように工夫したつもりである。新聞、雑誌、ビデオ、写真など身近を取り巻く多様なメディアを意識的に学習材、情報源として使っている。また、多くの学校でコンピュータを学習の場に取り入れているということもあって、それらを駆使した事例も積極的に取り上げた。コンピュータやデジタルカメラについては、導入の観点や機器に対する習熟の度合いが学校によって大きく違うことも考えられるが、応用の利く事例となるよう配慮した。

以上のような経緯で協力員が苦慮して作成した事例シートから、応用に適する25の指導事例をまとめたのが今回の事例集となった。事例内容の全体については「事例シート一覧」の通りであるが、冊子の構成は、使いやすさを考慮し学年順に並べたシート部分を第一部とし、その中から検証授業を実施した5例の学習指導案・資料編を第2部とした。

この中から、検証授業の実践報告を次に3例紹介する。また、学習指導案のサンプルについては1例のみであるが最後に掲載した。

1 『とりのくちばし』

〈第1学年〉

説明文「とりのくちばし」を読み、その後5時間扱いで他の鳥の嘴について調べ、説明文にまとめ、発表し合うという学習計画を立てた。

調べる学習には図書館にある鳥に関する本とコンピュータ「日本の野鳥」を活用した。子ども達は、この活動を通して鳥の姿形、鳥の生活に少しずつ興味をもつようになった。どの鳥の説明文を書くかということについては、教師が嘴に特徴のあるものを45種ほど選び出した中から決めさせた。嘴の形がよく表れている絵をコンピュータからプリントアウトした。このため、嘴は正確に提示できた。

説明の文は、教材文を手本にして、〈「 」は「 」です・ます。〉を基本文型としておさえ、書きやすくした。各自、鳥の絵や鳥についての参考資料を活用して、説明文を書き上げた。指導の必要な子どもについては、嘴の形のとらえ方を一緒に考えたり、どこでどんな餌をとるか提示したりして文を綴らせた。

発表は、3人1組で司会と発表を交互に繰り返していった。発表の内容は、鳥の嘴の説明とその鳥についてのクイズである。クイズは説明文の発表内容の中に答えがあるものにした。したがって、よく聞いてないと答えられないことになる。

以上のような授業を実践した。この一連の実践の中には、情報を収集、それを目的に応じて構成し直し、そして発信する活動がある。また、クイズを出すということが聞く側にとっては、耳から情報を受信し、処理して再発信するという活動につながっていったことになる。こういったそれぞれの場面で、「情報活用能力」が少しずつ育っていると考える。

低学年の場合、情報は必要に応じてできる限り精選して提示することが効果的であると考えられる。しかし、情報の所在によっては選び出せないこともあるので、目的により情報探しのポイントをしっかりおさえるべきである。

2 『人類はほろびるか』

ーディベートをしようー

〈第6学年〉

本単元では、環境問題をテーマにした教材文をきっかけに、児童一人ひとりが課題を持ち、チームで調べ活動をし、ディベートをする。これらの活動を通して、情報を読み、心の中で消化し、さらに調べ学習によって深化または広げた読みへと深まるとともに、ディベートによって相手に分かるようにまとめたり、それを分かりやすく発表したり、相手の意見をよく聞いて反駁するといった経験をする。

この学習過程では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」全てを網羅した国語科の総合レベルでの学習が期待される。

学習形態であるが、お互いに聞き合い、考え、話し合い（＝聞き合い）発表するといった観点から、グループは5～6人の構成が適切であると考えた。6グループできるわけであるが、2グループずつ3回にわけてディベートを行う。ジャッジは肯定側と否定側から1名ずつ出して行う。ほかの4グループは参観者となるように考えた。

ここで大切なのは、参観者であるが、『ほくだったらこう言う』の形で判定終了後に参加させることとした。自分達も同じテーマで調べ学習をし、論を述べるができるように文章の構築を行っているため、同じ次元で聞くことができ、発表することができたので有効であった。

換言すれば、このディベートはディベーターだけで成立するのではなく、多くの聴衆によって成立しているのである。必要感に迫られ、仲間との連帯の中で論破することの楽しさを子ども達は味わうことができたようだ。自分達でいろいろ調べた情報を、立場を変え、視点を変えてものを見るという意味で様々に活用出来たと思う。

3 『僕も私も新聞記者』

－効果的な表現を工夫して－ <第6学年>

本単元では、写真という映像（情報）が媒体となる。児童一人ひとりが五感を働かせて自分なりに詳しく写真を読み取る（すなわち、写真に混在する情報を読み取る）という活動を通して短作文に表すという表現活動をねらった。

児童の側からすれば、写真という映像（情報）に接する体験による認識の世界と、短作文にまとめあげるといふふたつの行程から成り立っている。

授業は2時間扱いで、一見少ないようにみえるが、これは、本単元のスキル学習としての意味合いから、

十分な時間配分であったと思う。

児童は思いのほか、写真の中に入り込み、表情やしぐさから状況を把握して表現をすることができた。さらには、観客の表情や様子にまでも目を向け、擬態語や擬声語等も多く使用することができた。

これはひとえに「写真」そのもののもつ魅力、アピール度があったからと思われる。本時は、人物の心情にまでも目を向けさせるという目的があったため、ドラマチックな場面が有効であったが、指導の目標、視点、切り込みに合わせての写真選定が本単元のような扱いでは重要なポイントとなってくる。

おわりに

本研究は、小学校における指導というサブタイトルを付して始まった。今後さらに、中学校、高等学校と継続してゆく予定であるが、ご覧のように、情報とは何か、情報活用能力とは何か、また、国語科でその育成を目指すということはどういう意味があるのか、さらには、マルチメディア社会の人間存在といった、今日的課題との関わりについては十分な検討がなされたと言ひ難い。これらの課題については、今後の研究の継続の中でひとつひとつ明らかにしてゆかなければならない。

今回まとめた事例集は、この難題に向き合うにはほんの些細な資料にすぎないが、その必要性を痛感し、「情報活用能力」の育成に関心を寄せる先生方に取り上げられてはじめてその意義を主張するものである。そのため、事例シートの内容もそれぞれ日々実践に当たる先生方の実態に会わせてアイディアと工夫が生かせるように簡単な記述にとどめてある。事例としては、学習の領域を充分にはカバーし切れていないが、作成した事例集が利用され、さらに多くの実践が生まれていく契機となれば幸いである。

[国語教育調査研究協力員]

相模原市立大野台中央小学校	岩崎 保博
小田原市立東富水小学校	小菅 克己
秦野市立本町小学校	小山ひより
川崎市立宮前小学校	須山佳代子
相模湖町立千木良小学校	米山 臣子

[教育指導員]

北見 亀吉

[長期研修員]

県立麻溝台高等学校	伊原伸一郎
-----------	-------

事例シート一覧

No.	事例	学年	指導の場	指導のねらい	No.	事例	学年	指導の場	指導のねらい
1	私がつくったカレンダー	1	表現	集める	14	段落のつながりに気をつけて「カプトガニを守る」「キョウリュウをさぐる」	4	表現	発信する
②	とりのくちばし	1	表現	発信する	15	言葉の働きを考えて「言葉と気持ち」	5	言語事項	集める
3	おはなしをつくらう	1	表現	発信する	16	言葉のおもしろさ -CMウォッチング-	5	言語事項	集める
4	カタカナを書きましよう	1	言語事項	整理する	17	夏の読書会を開こう	5	表現	整理する
5	はたらくじどう車のじまんをみつけよう	1	理解	集める	18	修学旅行レポート	6	表現	発信する
⑥	〇〇としょかんを作ろう	2	表現	発信する	19	生活を見直して「テレビとの上手な付き合い方」	6	理解	整理する
⑦	漢字の組み立て	2	言語事項	整理する	20	言葉の輪を広げよう「ことわざに親しむ」	6	言語事項	集める
8	こえに出して、はっきり読もう	2	表現	発信する	21	自然を見つめて「人類は減るか」	6	理解	発信する
9	クイズをつくって生きものはかせになろう	2	理解	整理する	22	豊かに想像して「やまなし」	6	表現	発信する
10	細かくみて様子を伝えよう -季節新聞作り-	3	表現	集める	23	「いのち」について考えよう「海の命」	6	理解	発信する
⑪	「たこあげミニ辞典」を作ろう 「たこたこあがれ」	3	理解	整理する	24	効果的な表現を工夫して -僕も私も新聞記者-	6	表現	集める
⑫	ヤドカリとイソギンチャク	4	表現	集める	25	言葉と文化のつながりを考えて「外来語と日本文化」	6	表現	集める
13	雪のあるくらし	4	表現	集める					

事例15 学習指導案 (その1)

- 単元 「たこあげミニ辞典」を作ろう (3年「たこたこあがれ」)
- 指導計画
 - ・教材文を読み、学習計画を立てる (2時間)
 - ・「たこたこあがれ」にあるたこの種類とそれにこめられた願いを読み取る (4時間)
 - ・「たこたこあがれ」の書き方をまねて、関東のたこを中心に一つ説明する (6時間) 本時11 / 15時間
 - ・自分たちの作った「たこあげミニ辞典」を読み合う (3時間)
- 本時の目標 教材文で学んだ凧の説明観点にそった取材メモを確かめる。教材文の書き方をまねて「たこあげミニ辞典」に紹介する凧の説明文を書くことができる。
- 展 開 相模原市立大野台中央小学校

学習活動	予想される反応	教師の働きかけ
1 前時までに取材したメモを確かめ、足りないところを補う。 ・メモに次のことが調べられているか確かめる ①場所 ②たこの名前 ③作り方 ④たこをあげる日 ⑤たこの大きさ ⑥絵・絵のせつ明 ⑦つけるものとせつ明 ⑧ねがい ⑨たこの役わり ⑩その他 ・いくつかの資料で調べる。 ・調べられる関東の凧 「だるま凧(秦野)」「あぶ凧(伊勢原)」「藤沢凧(藤沢)」「将棋凧(茅ヶ崎)」「かずさ凧(茂原)」「さがら凧(相良)」	・「ねがい」には、子どもが元気に育ってほしいというのが多い。 ・実際のたこの大きさはどのくらいあるかノートのいくつか分になるか調べてみる。 ・参考にする説明の仕方 <おようず> <だだこ> <一文てんぐばた> ①場所 場所 場所 ②凧の名前 あげる日 名前 ③作られ方 名前 大きさ ④凧をあげる日 大きさ・重さ 絵 ⑤凧の大きさ はるもの 書くもの ⑥絵・絵の説明 ねがい あげる日 ⑦つける物と説明 凧作り ねがい ⑧ねがい 凧の役わり	・関東地方を中心に凧の資料を準備する。 「やさしい和凧(大橋栄二)誠文堂新光社」 「美術ガイド凧 美術出版社」 「凧の民族誌(斎藤忠夫)未来社」 ・一つの資料から全部の項目を調べることは難しいのでいくつかの資料から調べるよう助言する。 ・調べても分からない項目は、自分なりに予想して書くよう説明の仕方を支援する。 ・参考にするたこの説明の仕方にそって文章表現をしているか個別指導する。 --- <だるま凧> --- ①場所 神奈川県秦野市 ②凧の名前 だるま凧 ③凧の大きさ 外形が卵形をしている ④絵 だるまがニマリ笑ったような顔をしている ⑤ねがい お百姓さんが豊作を祈ってあげた
2 取材メモをもとにたこの説明文を書く。 ・コンピュータに説明文を書く。 ・新聞に説明文を書く。 ・ビデオで説明する文を書く。	・コンピュータでの紹介(津軽凧、だるま凧、あぶ凧、はた凧、むかで凧、やこ凧) ・ビデオでの紹介(さがみの大凧) ・グループでの紹介(やっこ、浜松凧合戦、ゲイラカイト) ・個人での紹介(三つ、けろり、するが、せみやっこ、つがる、三じょう、とんび、座間の大凧)	・デジタルカメラの写真を、説明のページに呼び込む操作を支援する。 ・ビデオで説明するには、分かりやすい話し言葉で紹介文を書くよう助言する。